

「廃墟」の歴史地理

——摩耶観光ホテルを事例に——

金子直樹

はじめに

近年、廃墟を題材にした写真集やガイドブック類の書籍やDVD等が次々に発売され、またインターネット上には、多数の関連サイトが確認される。これらは現在、「廃墟ブーム」と呼ばれる現象が起きていることを示している（馬場 二〇〇四 一〇八―一〇九）。従来までの廃墟は、どちらかといえば戦争により破壊された事物に対して、用いることが多かったが、ここでのいう廃墟は、そうした象徴的なものではなく、閉鎖された鉱山や工場、ホテルなどの個別限定的なものである。

表一は、廃墟関連の書籍（以下、廃墟本と総称）の一覧であるが、これを見ると、一九九〇年代後半からその出版が顕著になっており、ブームがこの時期頃に本格化したことを確認できる。またこれらから、そこに引きつけられている廃墟マニアの様相が窺われる。それらは、①廃墟の写真撮影を目的とするもの、②廃墟への侵入自体を目的とするもの、③廃墟を舞台に戦争ゲーム（サバイバルゲーム）の敢行を目的とするもの等に大きく分類されるが、②に関しては、調査探索を主眼とするものから、肝試しや単なる遊び半分のものまで、かなりの幅がある。しかしいずれに

表一 近年の主な廃墟関連の本

作者	発行年	タイトル	出版社	備考
阿久井喜孝・滋賀秀実	一九八四	軍艦島実調査資料集 大正・昭和初期の近代建築群の実証的研究	東京電機大学出版局	
雑賀雄二・洲之内徹	一九八六	軍艦島 棄てられた島の風景 雑賀雄二写真集	新潮社	
菊池 豊	一九九一	軍艦島 残された航跡 廃墟が語りかける時	創栄出版	
柿田清英	一九九三	崩れゆく記憶 端島炭鉱閉山一八年目の記録	葦書房	
雑賀雄二	一九九三	月の道 海・月光・軍艦島	新潮社	
丸田祥三	一九九三	棄景 廃墟への旅	宝島社	
丸田祥三	一九九五	棄景 2 HIDDEN MEMORIES	洋泉社	
伊藤千行・阿久井喜孝	一九九五	軍艦島 海上産業都市に住む	岩波書店	
丸田祥三	一九九八	東京 棄景 3	洋泉社	
小林伸一郎	一九九八	廃墟遊戯 Deathopia	メディアファクトリー	
田端ヒロアキ	一九九九	懐古文化総合誌「萬」臨時増刊号 廃墟の魔力	愚童学舎	○
むらかみゆきこ	一九九九	軍艦島グラフィティ おもいでのおさんばみち	不知火書房	
丸田祥三	二〇〇〇	少女物語 棄景 4	春秋社	
切通理作・丸田祥三	二〇〇〇	日本風景論	春秋社	
丸田祥三	二〇〇一	鉄道廃墟 棄景 1 1971	JTB	
小林伸一郎	二〇〇一	廃墟漂流	マガジンハウス	○
増田彰久	二〇〇一	近代化遺産を歩く	中央公論新社	
関根虎洗・中筋純・中田薫述	二〇〇二	廃墟探訪	二見書房	
栗原 亨	二〇〇二	廃墟の歩き方 探索篇	イースト・プレス	○
板橋雅弘・岩切 等	二〇〇二	廃墟霊の記憶	角川書店	

増田彰久	二〇〇二	ニッポン近代化遺産の旅	朝日新聞社	
久瑠璃麴	二〇〇三	呪われた廃墟の恐い話	竹書房	
栗原 亨	二〇〇三	廃墟の歩き方 ² 潜入篇	イースト・プレス	
三五爾夢・栗原亨	二〇〇三	廃墟ノスタルジア	二見書房	○
丸田祥三	二〇〇三	廃車幻想 ポンコツ車からみえた「昭和」	彩流社	
心霊スポット研究会	二〇〇三	最恐心霊スポット 関東編	幻冬舎	
PRIDE	二〇〇三	墟	ぶんか社	○
雑賀雄二	二〇〇三	軍艦島 眠りのなかの覚醒	淡交社	
小林伸一郎・田中昭二	二〇〇三	廃墟をゆく 小林伸一郎写真集 <i>Deathopia series</i>	二見書房	○
丸田祥三	二〇〇四	鉄道廃墟	筑摩書房	
湯前悟郎	二〇〇四	廃墟探索 西日本篇	新風舎	○
堀 淳一	二〇〇四	歴史廃墟を歩く旅と地図 水路・古道・産業遺跡・廃線路	講談社	
奈良原一高	二〇〇四	無国籍地 <i>Stateless land-1954</i>	クレオ	
小林伸一郎	二〇〇四	<i>No man's land</i> 軍艦島	講談社	
高島町教育委員会編	二〇〇四	端島(軍艦島)	高島町	
萩原義弘	二〇〇四	巨幹残栄・忘れられた日本の廃鉱―萩原義弘写真集	窓社	
田中昭二・中筋 鈍	二〇〇五	廃墟、その光と影	東邦出版	

注：備考の○印はマヤカンについて写真あるいは記述のあるもの

しろ、彼らの多くが廃墟に侵入するという点においては共通している。

しかしこれらは、大半がその所有者や管理者の許可を得ない不法侵入であり、一部で破壊行為や放火等を行った例や、実際に侵入により検挙者まで出すほど問題化している(朝日新聞大阪版二〇〇二年一月二十九日夕刊)。無論、

こうした建物を撤去あるいは再利用することが最良の解決法だが、それらが廃墟となっているのは、最初から様々な理由により撤去困難であるためであって、問題として認識されつつも、実際にはその大半が放置されたままとなっている。

そもそもこうした廃墟は、当然のことながらブーム以前から存在していたが、それはインフォーマルなもので、その存在は周辺地域にのみ認知されていた。それが今や「軍艦島」や「松尾鉱山」等の有名廃墟には、マニアが日本各地から集まるという状況にある。これは、前述した廃墟本の存在も無視できないが、より重要なのはインターネットの普及によるものであった。これによって、どこにどのような廃墟が存在するかという情報が、地域を越えて伝達され、マニアの間に流通していった。むしろガイドブック的な廃墟本は、ネット上での情報をまとめたものと考えられる。

こうして廃墟の情報が網羅され、その位置や現状は勿論、それが如何なる理由で廃墟となったかという歴史についても、廃墟本あるいはネット上のサイトに写真入りで詳しく記されるようになっていく。しかしそれらは、主として伝聞によるものであり、事実かどうか疑わしいものも少なくない。そこで本稿では、神戸の摩耶山に廃墟として残されている「摩耶観光ホテル」（通称「マヤカン」）を事例にして、その歴史について検証したい。

こうした歴史は、廃墟というイメージの悪さもあって、どちらかといえば負の歴史として、あまり公にはなっていない。だがそれは、現代の様々な社会情勢に翻弄されたものであり、時に時代や地域の歴史ともリンクしている。社会学者の鶴飼正樹は、「現代に埋没している、現代の生活文化を伝える痕跡」として「現代遺跡」という概念を提起している（鶴飼 二〇〇〇 二〇）。それは「現代に生まれながら、一面では現代と断絶し、一面では現代と連続したものである」という（鶴飼 一九九〇 二六）。そしてそれは、かつては鉱山やホテル等でありながら、その機能を失った廃墟も、当然該当しよう。またマヤカンの場合、その廃墟化への歴史は、近現代における摩耶山の観光の衰退

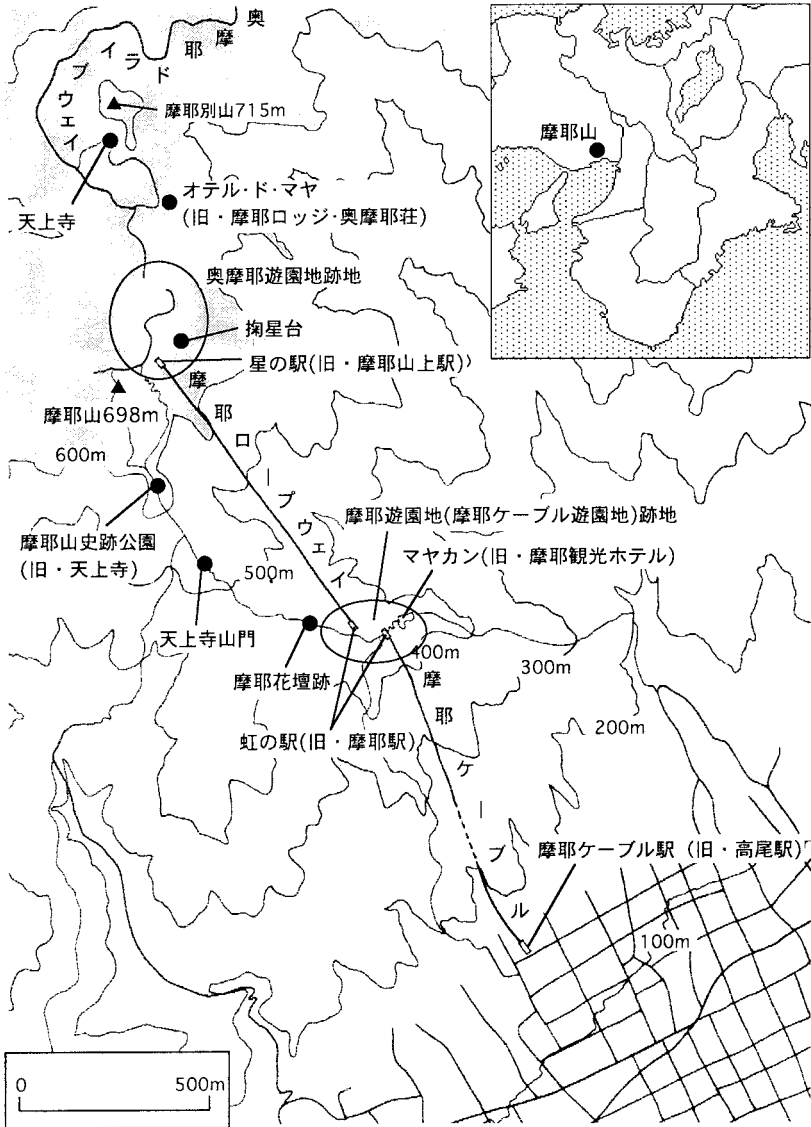


図1 摩耶山周辺図

資料：国土地理院 1/10000 地形図「摩耶山」(平成 11 および平成 3 年修正)をもとに作成

に影響を受けたものであった。よって本稿では、現代遺跡としてのマヤカンという廢墟を対象にして、かつてのホテル時代と廢墟となった事情を検証するとともに、それが立地する摩耶山の変貌について、マヤカンとの関連性を中心に確認していく。

一 摩耶山の概要およびその観光地化

マヤカンのある摩耶山は、神戸市街地の背後に聳える六甲山地にある一峰である。標高は六九八mだが、市街地に隣接しているため、他の峰に比べ一際目立つ山容を呈している。摩耶山という山名は、釈迦の母である摩耶夫人を祀る仏母摩耶山切利天上寺（以下、天上寺と略す）が同地にあったことに因んでいる。同寺は、六四五（大化元）年頃に摩耶別山付近で創建されたが、八〇三（延暦二一）年二月の火災により摩耶山中腹に移転したという（仲 一九一一―一二）。以後、天上寺は後述する一九七六（昭和五一）年の火災まで、同地に鎮座しつづけた。

そして江戸期より、同寺のあった摩耶山は、大阪近郊の名所として観光地化していった。当時のガイドブックには、見所としてその由緒や伽藍の他、山上からの眺望を「衆州を下瞰す。これ当邦の一佳景なり」（秋里 一七九六）等と、眺望の良さが記されている。その状況は、明治期以降も受け継がれ、特に一九〇五（明治三八）年に阪神電鉄（大阪出入橋―三宮）、一九（大正八）年に阪急神戸線（梅田―上筒井）が開通すると、新たに開発された海水浴場・温泉地・遊園地などの観光地（「阪神間モダンイズム」展実行委員会 一九九七）とともに、摩耶山等の既存の観光地についても、旅客需要増進のため盛んに宣伝がなされた。例えば、一九〇九（明治四二）年の阪神沿線の名所案内には、「大石停車場」（現・大石駅）の項に摩耶山や天上寺等が記載され、また「毎年夏季に至れば内外人暑を茲に避くるもの多く」と避暑地としての位置づけも確認される（西垣 一九〇八 六八）。ただしこの当時は、摩耶山を含め

六甲山地に、ケーブルや自動車道等の近代交通機関は存在しておらず、そのアクセスに問題があった。

こうした中で、大正期に摩耶山へのケーブルカー建設への動きが起こった。一九二二（大正一一）年十月、阪神電鉄の関連会社として摩耶鋼索鉄道株式会社が発立され、武庫郡西灘村上野字絵馬堂（高尾駅、標高一四〇m）より同村上野字小屋馬三ノ休原（摩耶駅、標高四五〇m）まで全長九六五mの敷設工事が行われ、二四（大正一四）年一月六日、「摩耶ケーブル」として開業した（以上、六甲摩耶鉄道株式会社社史編集委員会 一九八二 四五 以下、六甲と略す）。

開通当日の新聞記事は「山の脊の急峻を縫うて摩耶の霊峯へ 登山索道が竣工して愈よけふから開通す」という見出しで、「絶頂まで僅に七分間で着く、其處から天上寺まで七町、老人でも楽に行ける（中略）神戸にも一つの名物が出来た訳だ」等とその開通を知らせている（神戸新聞一九二五年一月六日）これによって、摩耶山および天上寺へのアプローチは容易になり、多くの人々がケーブルを利用して同地を訪れるようになった。初年度の旅客人員は五万人にのぼり（六甲 一〇四）、これは一日平均約一五〇〇人がケーブルを利用したことになる。また高尾駅と阪急・神戸市電の上筒井駅および阪神の大石駅等からのバス路線も整備され（摩耶鋼索鉄道株式会社 一九二九 以下、摩耶と略す）、摩耶山は手軽に行ける近代的観光地となった。

このアクセスの良さもあってか、ケーブル開通後のガイドブック類には、天上寺や後述する遊園地・ホテルの他に、それまで奥の院のみが記載されるだけであった摩耶山頂地区について、新たに「八洲嶺」や「掬星台」の名所が記載されるようになった。これらは、戦後の摩耶山観光においてより中心的な位置を占めることになる。

二 摩耶山温泉ホテル

ケーブルの開業と同時に、摩耶駅周辺の摩耶山中腹地区は摩耶山遊園地として整備され、食堂建設や遊戯具、動物小屋、ベビーゴルフ場の設置、桜等の植樹、夏季テント村の開設等が行われた（六甲 年譜）。これらの経営については、一九二五（大正一四）年九月にケーブルと別会社化された摩耶山株式会社によって行われたと考えられるが、二七（昭和二）年十月の『兵庫県銘鑑』には、会社の目的として「療養所ホテル食堂および浴場娯楽場経営」と記載されており（灘三カ村神戸市編入五十周年記念行事協賛会 一九七九 一〇七 以下、灘と略す）、同地へのホテル建設は当初から予定されていた。

二九（昭和四）年五月一五日、前年に西灘村等周辺一三町村から借入契約を結んだ摩耶駅東隣接地で工事が開始され、同年十一月六日に完成、一六日に営業を開始した（六甲 年譜）。工事費用は三〇万円（神戸新聞一九二九年十一月一七日）で、「鉄筋コンクリートの四層楼にして総坪数六百五十坪」（摩耶）、「アールヌーボー風の洋風ホテルは神戸っ子の話題をさらった」という。またL字型の形態で、海側にせり出した部分が船のブリッジを想像させることから、「山の軍艦ホテル」とも呼ばれた（以上、朝日新聞神戸支局 一九七七 以下、神戸支局と略す）。

これが、現在のマヤカンの元となるホテルである。既存の文献では、開業を三三（昭和七）年春とされているが、当時の新聞記事に「豫ねて建築中だった摩耶山上のマヤホテルはこの程竣工十七日から開業した」（神戸新聞一九二九年十一月一七日）とあり、また二九（昭和四）年十二月発行の「摩耶山案内」にも「摩耶山温泉ホテル（オンセンホテル）」が写真入りで詳しく記載されている（摩耶）。よって開業は、二九（昭和四）年十一月と確認できる。ただし当初は、ケーブル摩耶駅から東側の急な斜面を降り三階部の出入口（ホテルは斜面にあるため一・二階は半地下



図2 摩耶山温泉ホテル
資料：「摩耶山案内」（1929）



図4 大食堂
資料：図2と同



図3 余興場
資料：図2と同



図5 ホテル客室
資料：図2と同



図6 近年のマヤカン（正面）
資料：友人提供



図8 かつての余興場
資料：図6と同



図7 マヤカン遠望
資料：図6と同



図10 マヤカン側面
資料：図6と同



図9 かつての大食堂
資料：図6と同

式)に至っていたようで、その後、翌三〇(昭和五)年四月に摩耶駅から、ホテル四階部へ直接連絡する渡廊下が完成している。また当時の建築学の雑誌にも、竣工は「昭和五年二月末日」(京阪神新建築集 一九三一)とあることから、この時は仮営業であったとも考えられる。

またこれらの資料からもわかる通り、マヤカンという名称の元である摩耶観光ホテルは、戦前の資料からは確認されず、「摩耶ホテル」「摩耶山温泉ホテル」「摩耶倶楽部」等いくつかの名称が記載され、どれが正式名であったか不明瞭である。これは同施設が、単なるホテルだけではなく、「旅館兼料理屋、風呂場、餘興場がありレビュウや映画をやる」(神戸新聞一九二九年十一月二七日)という複合施設であったためと考えられる。当時のガイドブックおよび戦後の文献(摩耶・松川 一九三五・神戸支局)に、その詳細が記載されているが、それらによると、一・二階がホテル部分であり一階が和室、二階が洋室で計一三室あった。三階には大食堂・娯楽場・浴場があり、四階は四〇〇人収容の余興場(「摩耶山会堂」)で、映画・演芸・演劇を催したという。開業当時の新聞記事には「まや山温泉山の静けさを破るジャズの響 少女舞踊、活動映画 △昼は一時より△夜は五時より ケーブル線夜十一時半迄 まや山ホテル まや山食堂」(神戸新聞 一九二九年十二月八日等)と記された広告が、頻繁に掲載されている。

これらの事項から、摩耶山温泉ホテルはホテルというよりも、浴場を中心にした現在の健康ランドのような存在であったと考えられる。摩耶山は「六甲山と宝塚をつきまぜて小型にしたようなものと思っただら先づ間違ひない」(松川 一九三五 三三一)と評されるように、周辺地域でも異色の観光名所であったようである。既存文献では、一樣にこの施設が繁盛していたと記されているものの、その具体的な状況について確認できない。ただしケーブルの旅客人員については、開業以降減少してホテル開業の二九(昭和四)年には四〇万人を割り込んだものの、翌三〇(昭和五)年には六〇万人を越える大幅な増加を示している。これには同年十月に阪神沖で行われた海軍特別観艦式見物の効果もあったが、やはりホテルが大きなインパクトになっていたと推測される。この摩耶山温泉ホテルの時期は、マ

ヤカンの歴史においておそらく最も賑わいを見せたと考えられる。

二三 ホテル閉鎖と摩耶山観光の再生

摩耶ケーブル旅客人員は、太平洋戦争開始後に大きく減少し、一九四三（昭和一八）年度は二〇万人を下回るまでになった。翌四四（昭和一九）年二月一日、ケーブルはレールや車両等の供出のため、運転を休止した（六甲 四六・年譜）。これにより、摩耶山温泉ホテルや遊園地等の施設も、営業継続が困難な状況になったと考えられる。既存文献でも「前後してホテルも営業をやめた」（神戸支局）等としているものが多い。しかし六甲摩耶鉄道の社史には、ケーブル休止に際して「兼業の土地家屋及び温泉業は時局国策に副うよう営業継続」とあり、さらに終戦の八月一五日の項でも「兼業の土地家屋及び温泉業（旅館および食堂）は営業継続」（以上、六甲 年譜）と記されている。いずれにしろ、これは必ずしもホテルが営業を休止していなかったことを示唆している。ここにある「国策に副う」が、具体的にどのようなものか不明である。ただし、四三（昭和一八）年末に摩耶山頂に六甲山方面よりの軍用自動車道（後の「奥摩耶ドライブウェイ」）が完成し（山本 一九八一 一三三）、掬星台が高射砲陣地として整備されている（灘 一〇八）。この状況と前記の記述とを考慮すれば、あるいは軍用の施設とされたのではないかとも推測される。

また戦後の四六（昭和二一）年四月に、ホテルを「米軍の将校クラブ」にするという話が持ち上がり（神戸支局）、そのため実際に修理改造工事およびケーブルの復旧工事が五月中旬まで行われていた（六甲 年譜）。結局、これは中止されたが、こうした計画が発案された背景として、戦時中の利用状況に触発されたものとも推測される。いずれにしろ、ケーブル休止以後の摩耶山温泉ホテルは、終戦まで特殊な形態での営業が行われたものの、その後は事

実上、閉鎖に追い込まれた。

以後、一五年以上にわたりホテルは閉鎖され、廃墟ともいうべき状態になった。既存文献やネット上のサイトによると、「無人化したホテルに引き揚げ者ら住みついた」ことや（神戸支局）、「その頃、摩耶観光ホテルは（多分空襲を受けたのでしょうか）やはり廃墟のようで、子供心に建物を探検する事にワクワクしたものでした。天井は一部大きな穴（爆弾？）等があいており、美しかったであろう窓も殆ど壊れていました。」（摩耶観光ホテルの謎に迫る）等と記されており、当時の荒廃した様子が窺われる。

このホテルの状況は、何よりケーブルが休止したまま、一〇年以上も復旧されなかったことに影響されていた。レール等を撤去したため、復旧するにも本格的な工事が必要であり、資金面からなかなか進まなかったようである。「線路あとは雑草が生い茂り、施設は荒れ放題で惨憺たる状態」で、「駅舎は廃屋となつて見るかげもなくわずか数人の山上住民」と時折「天上寺参詣客がワラジにはき変え、トボトボと登って行くわびしい姿はそのまま当時のケーブルを象徴しているかのように映った」という（六甲 四八）。

このように戦時中から昭和二〇年代、摩耶山の観光は停滞を余儀なくされた。だが一方で、その後の新たな開発への布石も打たれていた。それは前述の高射砲陣地となった掬星台および、それに伴う奥摩耶ドライブウェイの整備であった。これらは軍事用の開発であったが、終戦直後に神戸市がこれらを買収した（灘 一〇八）。特に奥摩耶ドライブウェイは、同時期に整備された「西六甲ドライブウェイ」と直結しており、神戸市街から摩耶山頂地区まで、自動車で行くことが可能になった。この道路の名称が示すように、戦後の摩耶山観光は、それまでのケーブル摩耶駅周辺の摩耶山中腹地区から、奥摩耶である摩耶山頂地区を中心に進められていくのである。

それが本格的に動き出したのは、一九五二（昭和二七）年頃からであった。それは、摩耶山を含めた六甲山全体の瀬戸内海国立公園追加編入への運動に連動している。この動きは、五六（昭和三一）年五月の編入決定として結実す

るが、この時期の摩耶山はこの運動のもと、神戸市による積極的な開発が進められることになる。

五二（昭和二七）年に奥摩耶ドライブウェイおよび掬星台付近の整備工事が開始され、五三（昭和二八）年七月からは、摩耶山上へのバス運行も開始された（以上、灘 一〇八）。さらに神戸市は、ケーブルを復活させるといふ阪神電鉄の意向を受け、ケーブル摩耶駅から摩耶山頂へのロープウェイ建設を決定した。そしてレール・車両・駅舎等の敷設を行ったケーブルが、まず五五（昭和三〇）年五月七日に営業を再開し、続いて七月一二日に摩耶駅から摩耶山上駅まで全長八二六mの「奥摩耶ロープウェイ」⁽¹⁾が開業した（以上、六甲 四八〜四九・年譜）。

これに合わせ、掬星台周辺は、「奥摩耶遊園地」となり、「虹のかけ橋」と名づけられた屋根付きの展望台をはじめ、食堂、売店、休憩所、各種遊戯施設が設置された（毎日新聞神戸支局 一九六三・一二九）。また五四（昭和二九）年七月二四日には、同所近辺に「ホテル奥摩耶荘」⁽²⁾が開業し（六甲 年譜）、その同時期にユースホテルやバングロー村等の宿泊施設も整備された（神戸市経済局観光課 一九六三・五四）。このように摩耶山頂地区は、昭和三〇年頃に急速に観光地としての整備が進められ、「ウィーク・デーでも千五百人、休日には六千人もの人たちが押しかけ」るほどになったという（毎日新聞神戸支局 一九六三・一三〇）。実際、復活初年のケーブルの旅客数も、五月からの数値であるにもかかわらず約五五万人と戦前の水準以上の成績を記録している（六甲 一〇四）。

また戦前の摩耶山遊園地も、「摩耶ケーブル遊園地」として再整備が行われ、五六（昭和三二）年から数年間に、元々存在していた個人経営の飲食店に加え、食堂や売店、展望台、バングロー、さらには遊戯施設が建設された（六甲 年譜）。しかし、こうした取り組みにもかかわらず、「ロープウェイの完成するまではケーブルの終着駅として異常な繁栄を示した天上寺付近は完全に没落して往事の盛況をしのぶべくもなくなった」（稲見・森 一九六八 一七五）と記されるように、同地は戦前の賑わいを取り戻せなかった。上記にある通り、戦前はケーブルの終点であったが、ロープウェイ開通によって、そこは乗り換えの中継地となった。それはすなわち、同地が奥摩耶に向かうための

単なる通過点になったことを意味していた。さらに昭和三〇年代後半からは、いわゆるモーターゼーションの勃興によって、ドライブウェイを利用して摩耶山頂地区へ自動車で向かう観光客が多くなり、中腹地区への人の流れが減少した。

そして実際、この流れはすでにケーブル・ロープウェイ開通直後から少なくなかったとも推測される。それはケーブル（定員七五人）とロープウェイ（定員二五人）の輸送アンバランスによる、乗換の長い待ち時間の発生によるものであった。社史によると、これによって「次第に人気を落とし（中略）乗車人員が年々減少し昭和三五年度は四二万人まで落ち込んだ」（六甲 四七）という。それは表面的には、摩耶山への人出自体の減少を示唆しているが、一方で路線バスや自動車で摩耶山に行く流れが早くから存在していたことを暗示している。いずれにしても、この時期の摩耶山は、奥摩耶遊園地を中心とする摩耶山頂地区は繁盛し、摩耶ケーブル遊園地を中心とする摩耶山中腹地区は衰微しつつあった。そんな時に、長く打ち捨てられていたマヤカンが復活するのである。

四 摩耶観光ホテル開業および摩耶山観光の衰退

摩耶山にケーブル・ロープウェイが開通した後も、マヤカンは依然として閉鎖されたままであった。これに対して、ケーブルの関係者は、「かねてから懸案であった「摩耶山温泉」の復活」（六甲 四七）と記されるように、以前からその再開を考慮していたと考えられる。しかし前述の通り、この時期のマヤカンは、現在の状態ほどではないにしても、ほぼ廃墟化していた（毎日新聞神戸支局 一九六三 一七三）。このため、仮に再開するにしても、その修復には相当な資金が必要であり、これが最大の障害となっていたと推測される。

しかし、ケーブル復活数年にしての旅客人員の大幅な減少が、ついにマヤカン再開への動きを現実化にさせた。一



三宮より20分 摩耶山上駅
 摩耶製氷工場跡
 PHONE 86)1231-3

☆三宮から20分、スモッグと喧騒から遮断されたユートピア・摩耶山
 ここの忘年会は俗弊を離れ天界から世界大夜景の精一を楽しみながら低酌される
 ことをおすすめします。

池年会費(お酒代、サービス料、検金込)

コース	御一人様料金	料理	酒(1級)	ビール
スキャキ	1,000	スキャキ	1本	1本
まや鍋	1,500	まや鍋	2	1
橋公鍋	2,000	橋公鍋 船長ブルック	2	1

- ・まやケーブル高尾駅で食事クーポン券(¥500)を贈られますと、ケーブル乗賃は当ホテルで負担します(券類は当ホテルで御支払下さい)
- ・その他御予算により、如何様の御相談にも応じます。御予約は早目にどうぞ

図11 摩耶観光ホテル時代の案内(1)

九六〇(昭和三五)年九月一日、旧・摩耶山温泉ホテルは「民間ホテル業者」に売却され(六甲 四七・年譜)、以後はその業者によって建物の修復作業が行われた。これについて、一部では「破格値」と評されている通り、非常に安価で売却されたようであるが(神戸支局)、これは当時のマヤカンの破損状態を裏打ちしていると判断される。業者は、数千万円をかけて四階建ての建物(神戸支局)を五階建てに増築し、内装はフランスの豪華客船イル・ド・フランスの操舵輪・ステンドグラス・木製のベット等の家具・装飾品を使用したという(神戸支局)。これは、明らかに「軍艦ホテル」というイメージを利用し、より船舶らしいアレンジを加えられたものであった。当時の案内からも、ホテル正面



MAYA KANKO HOTEL
 電話 86)1231-3
摩耶観光ホテル
 TEL KOBE 81231-3

御案内
 お花見と行楽に!!
 十二、三日頃から桜が咲き始めます。
 足下に眺める花筵の姿も又格別の風情があります。
 ボーリング場の開設
 新緑地にボーリング場を開設致しますので、御手様連れで御来遊をお待ち申します。
 ダンスパーティー開催
 パンキー白片と彼のアロハ・ハワイアンスを連れたハワイムードのダンスをお楽しみ頂きます。
 と、とき 五月四日 五時より 入場券 二五〇円
 電話 神戸 第一二二二〇三番
 摩耶観光ホテル

図12 摩耶観光ホテル時代の案内(2)

に操舵輪が掛けられていることを確認できる。

以上のような改修工事の結果、翌六一（昭和三六）年八月二六日、同ホテルは「摩耶観光ホテル」と改称され、営業を開始した（六甲 年譜）。建物は、増築されて四階建てから五階建てになったが、ホテル内に掲示された見取図によると、一・二階部の客室部分を、「一階 ホテル客室」として一括して扱っている。このため三階は「二階 ロビー・カジアルコーナー外」、四階は「三階 大ホール・グリル外」、五階は「四階 大宴会場・中宴会場」と記されている（「摩耶観光ホテルの謎に迫る」）。このうち、グリルは元の屋外の展望台を転用し、宴会場がその上部に建て増しされた部分である。

当時の案内によると、摩耶山を「三宮から二〇分、スモッグと喧騒から遮断されたユートピヤ」「神戸港を眼下に俯瞰し、背は峨々たる大自然を感じる仙境」、同所からの夜景を「千ドルの夜景」⁽³⁾、そして同ホテルについて「眺望絶佳 名物 炭酸温泉露天大岩風呂・三百畳敷の大広間」「パーティ・お食事・ご宿泊に山のレジャー・ホテル」等のキャッチコピーが付されている。名物として、「楠公鍋」や「摩耶鍋」等の鍋料理が盛んに宣伝されており、料金は八〇〇〜二〇〇〇円であった。また季節ごとに、イベントやパーティ等が行われたようで、夏にはビアガーデン、秋にはお月見パーティ、冬にはクリスマスパーティー等が確認できる。特にビアガーデンについては、屋上部分を利用しており、「スカイビヤガーデン」「空中ビアガーデン」と称され、毎夜五時〜一時まで土日には「有名バンドやダンシングチームの出演」が行われたようである。こうした状況から摩耶観光ホテルは、戦前の健康ランド的な摩耶山温泉ホテルとは異なり、宴会・パーティを中心とした飲食主体の施設であったとも考えられる。

こうして復活した摩耶観光ホテルは、斜陽になりつつあったケープル摩耶駅周辺の活性化の切り札的存在であった。実際、ケープルの旅客人員は、ホテルが開業した六一（昭和三六）年に、前年の四二万人から一気に五二万人まで増加し、翌六二（昭和三七）年には五十四万人を記録している（六甲 一〇四）。これはおそらく、ホテル開業によ

る効果であり、一時的に戦前同様の賑わいを呈したとも推測される。

しかし、その賑わいは短かった。既存文献によれば、六七（昭和四二）年夏の台風被害によりホテルが閉鎖されたという（神戸支局・栗原 二〇〇〇など）。その被害は、おそらくは同年七月九日に起きた集中豪雨によると想定される。この日、神戸では台風七号から変わった温帯低気圧によって、三〇〇ミリ以上の雨量を記録し、六甲山地で二五〇〇ヶ所以上の山崩れが発生し、死者・行方不明者九二人を数える大災害となった（六甲山災害史 一九九八 一九・一二二）。摩耶ケーブルも数ヶ所で土砂崩れが発生し、一五日まで運休している（六甲 五七）。こうした状況からして、ホテルも被害を蒙ったとも推測される。

ただし、その被害状況については台風被害の他、一部「塩害」（湯前 二〇〇四 七七）とも伝えられている以外は、明らかに不十分な。筆者が摩耶学生センター時代に聞いた話では、海水が巻き上げられ、建物内部にまでかかって、壁紙等の内装にダメージを受けたという。仮にそうだとするならば、被害は暴風によるものと考えるのが自然であろう。しかし、同年七月は台風とはいえず、集中豪雨による災害である。しかもホテルの立地は尾根筋にあり、風による被害は受けやすいものの、土砂崩れの危険性は比較的低い場所であった。このことからホテルの閉鎖は、この水害によるものとは断定はできない。別の資料では、閉鎖を七一（昭和四六）年としているもの（KANSAI TWILIGHT ZONE 一九九〇）もあり、あるいは別の台風によるものとも考えられる⁽⁴⁾。ただしいずれにしろ、摩耶観光ホテルの災害による閉鎖は、およそ昭和四〇年代前半から半ば頃と想定される。

一方、ホテル開業から改善していたケーブルの旅客人員は、六五（昭和四〇）年から再び減少し、七一（昭和四六）年には三〇万人を割り込むまでになった（六甲 一〇四）。これには、ホテル閉鎖が少なからず影響したとも思われるが、実際にはモーターゼーションの進展があったと考えられる。この時期、自動車で行くことができない摩耶山中腹地区の経済的衰退はより顕著になったのである。そして経営難から、摩耶ケーブルは七五（昭和五〇）年に六

甲ケーブルと合併した（六甲 四七）。

さらにこの傾向を決定的にしたのが、天上寺の火災であった。七六（昭和五一）年一月三〇日夜、本堂から出火し、夫人堂・多宝塔・護摩堂等の主要伽藍が全焼した（神戸新聞一九七六年一月三二日夕刊）。さらにその復興に関して、創建の地とされていた摩耶山頂地区の摩耶別山に新伽藍を建設することが決定され、火災から五年後の八一（昭和五六）年二月に、神戸市との交換契約が結ばれ、伽藍整備に向けた工事が開始された。そして八三（昭和五八）八月に「中院」、八五（昭和六〇）年に「金堂」がそれぞれ完成した（以上、摩耶山天上寺 昭和復興の記録 一八九七）。一方、天上寺の旧地は神戸市の所有となり、同時期に「摩耶山史跡公園」として、同寺の説明を施した掲示板が設置された。

こうして天上寺は、火災を契機に約一〇年をかけて、中腹地区から山頂地区に移転した。これによって、ケーブル摩耶駅から歩いて天上寺に向かう参詣者は、全く皆無となった。そして昭和五〇年代の間に、ケーブル遊園地の施設や近隣の個人店舗等は、次々に閉鎖・撤去された。ここに摩耶山中腹地区における観光施設は、衰滅するに至ったのである。

一方、摩耶山頂地区も同時期に、施設の老朽化および利用者の落ち込み等から、遊園地内の遊戯施設や飲食店等が次々に閉鎖・撤去され、一帯は摩耶自然観察園として再整備された。これは、摩耶山での観光が従来の遊園地を中心にしたものから、より自然に親しむものへと変容したことを示唆しているが、それは経済的側面において明らかな衰退であった。その意味では、摩耶観光ホテル閉鎖や天上寺焼失に関わらず、この時期に摩耶山全体で観光の凋落が進展していたと考えられる。

五 摩耶学生センターから廃墟・マヤカンへ

摩耶山が観光地として機能を低下させていた昭和四〇年代後半、摩耶観光ホテルは一足早く閉鎖されていた。しかし、それがそのまま廃墟になったわけではない。確かに建物それ自体は損傷を受けていたはずだが、そんな中でもマヤカンは、一九九三年まで営業を継続させていたのである。

朝日新聞神戸支局による『兵庫の素顔』によると、同書が発行された一九七七（昭和五二）年より七年前というから、おそらく七〇（昭和四五）年に管理人として、七七年時点で六五才であった男性とその妻がホテルに住み込むようになったという（神戸支局）。彼らについて、ネット上の書き込みには、「元は「段ボールを作る職人さん」で「ホテル業者から依頼された」と記されている（「摩耶観光ホテルの謎に迫る」）。そして彼らは、「三年前から学生のゼミ、サークル合宿等に限って施設の一部を開放した。自炊だが、荒れた中にもどことなく漂うロマンが若い人たちの人気を集めている」という（神戸支局）。この記述から、七四（昭和四九）年より格安の宿泊施設として営業を開始したことになる。ここにはその名称は書かれていないが、「摩耶学生センター」という名で営業を行っていた。

そして、昭和五〇年代から平成初年頃にかけて、同所は特に近隣大学学生サークル等の合宿先として利用された。それは、ここを実際に利用した人達による記録からも確認できる。その中には、七二（昭和四七）大晦日から翌七三（昭和四八）一月二日にかけて泊まったというものもあり、営業開始が数年早かったとも推測される。また確かに、その当ても廃墟同然であったようだが、摩耶観光ホテル時代に揃えられたと思われるベッドや調度品が残っており、その後も使用されていた様子も窺われる（以上、「摩耶観光ホテルの謎に迫る」）。

このようにマヤカンは、摩耶山温泉ホテル、摩耶観光ホテルに続いて、摩耶学生センターとして第三の歴史を刻ん

でいたのである。しかもそれは、半ば廃墟化したものを、むしろアピールしたものであった。それはこの時期から、同所が映画やテレビドラマのロケ地となったことから確認される⁽⁶⁾。そしてこうしたあり方は、前述した摩耶山自体の経済的凋落の結果ともいえる。もし摩耶山が昭和三〇年代のような観光地で有り続けたならば、被害を受けたとしてもホテルは修復され、営業を続けていたと考えられる。よって摩耶学生センターは、摩耶山観光の衰退状況がなければ発生しなかった特異な存在といえよう。

その学生センターが閉鎖されたのは一九九三（平成五）年頃であった。理由については既存文献等で多く記される管理人の体調悪化によるものである⁽⁶⁾。管理人は七七年段階で六五才と記されていることからして、閉鎖前後には八〇才近い年齢であり、体力的にも限界であったとも想像される⁽⁷⁾。こうしてマヤカンは約二〇年間の学生センターとしての機能を停止し、その後、建物は神戸市に無償譲渡され、ケーブルを経営する六甲摩耶鉄道が暫定的な管理者となった（「摩耶観光ホテルの謎に迫る」という。しかしそれは事実上、まったくの廃墟になったのである）。

その数年後、九五（平成七）年一月一七日に起きた阪神淡路大震災により、摩耶ケーブル・摩耶ロープウェイは営業を休止した。それは表面的には、施設の被害によるものであったものの、それまでの低迷する旅客人員による赤字経営も影響していた（毎日新聞大阪版一九九五年八月二六日）。これにより、山頂地区にあった売店や国民宿舎摩耶ロッジが閉鎖されたが、前述のように同地区はそれ以前から経済的に空洞化していた。またケーブル摩耶駅周辺の中腹地区も、旧遊園地や天上寺の施設もすでに廃墟化していた⁽⁸⁾。この意味では、これらの休止は、仮に震災がなくても遅かれ早かれという事態であったとも考えられる。いずれにしろ震災後の摩耶山、特に中腹地区は、登山を楽しむハイカーのみが来訪する場となった。山中には、マヤカンを中心にした廃墟が点在していたが、この時期それらに関心が向けられることはなかった。

しかし、続く「廃墟ブーム」の到来により、それは一転注目を集めることになる。マヤカンが廃墟本に最初に取り

上げられたのは、九九（平成一一）年十一月の『萬』からであり、以後多くの廃墟本・DVDで取り上げられ有名な廃墟の一つに数えられるようになった。それ以前から神戸および周辺地域では、マヤカンの存在について、同所が廃墟同然にも関わらず学生センターとして営業を行い、不特定多数の人々が実際に出入りしたこともあって、すでに有名な廃墟として認知されていた。しかし、これらの本や同時期から普及してきたインターネットによって、地域を問わず多くの廃墟マニアに認識される存在となった。

そして、二〇〇一（平成一三）年三月に摩耶ケーブルおよび摩耶ロープウェイが、神戸市が一括して運営する「まやビューライン 夢散歩」として、六年ぶりに営業を再開すると、こうしたマニアが度々マヤカンに侵入するようになった。それは同時期から、ネット上にその侵入写真を掲載したサイトが多数立ち上げられたことから確認できる。ビューライン開通とともに実質的管理者となった神戸市は、危険防止のために立ち入り禁止の柵等を設置しようだが、上記のネット状況から、それは十分な効果をあげているとは言い難い。しかし、アクセスが悪いこともあり、遊び半分で作って来て時に破壊行為等行う者は、他の廃墟に比べ少数なようで、ネット上のサイトからは、廃墟としての保存状態の良さを評価する記述が確認される。

おわりに

以上、マヤカンおよび摩耶山の歴史的経緯について検証した。これらから浮かび上がってきたことが二点ある。

まず、マヤカンの当初から想定されたホテルとしての機能した期間が、戦前の一五年と戦後の約六年を合わせても二〇年足らずに過ぎずなかったということである。その理由は、具体的にはケーブルの休止や気象災害など個別の事情によるが、これらはより根本的な問題に根ざしている。それは、摩耶学生センターの管理人が端的に「戦後の観光

ブームの主役の自動車道からはずれたのが響いたんですよ」(神戸支局)と語った通り、マヤカンに自動車を通れる道路がなかったことである。また逆に考えれば、マヤカンを含めた摩耶山中腹地区は、それを必要としなかった戦前までの古い観光地であったということになる。それを踏まえれば戦後、同地区の活性化を目指して復活したマヤカンの運命は、仮に災害が起きなくとも、そう長くはないものだったといえる。

次にホテルとしての機能を停止し、半ば廃墟と化したマヤカンが、ある意味それを「売り」にした宿泊施設として二〇年以上も機能していたという点である。これは現在のブームによって、よりクローズアップされている廃墟の問題に一つの示唆を与えている。すなわち、廃墟を廃墟として、あるいは文字通り現代遺跡として残すことで、その新たな役割を付与できるとも考えられる。例えば長崎県の「軍艦島」では、それを世界遺産への登録を目指した活動が行われているが、その保存への議論でも「廃墟としての魅力にあふれている」という意見も出されている(毎日新聞長崎版二〇〇三年九月三日)。マヤカンの場合も、ケーブル・ロープウェイ復活の頃から兵庫県教育委員会を中心として、文化的な近代建築として修復・保存することを検討されている⁽⁹⁾。一方、それが山中に朽ちつつある美しさ、総じてマニアに高く評価され、複数の廃墟本にも取り上げられている。それらは確かに一部の見識に過ぎないが、廃墟の問題を考える際には単なる撤去や完全な修復・再生ではなく、かつてのマヤカンのように、廃墟としてあり方もあっても良いのかもしれない。

そのように考えると、マヤカンはホテルとしての機能を経て、現在は侵入され、鑑賞される廃墟としての役割を果たしているとも言える。それは摩耶山における観光の衰退に関連したものであり、これらの点をふまえれば、マヤカンのような廃墟は単なる巨大な廃棄物ではなく、現代社会の様々な事象を残す存在なのである。時には本稿のように、そうしたものに目を向ける必要があると考えられる。

註

- (1) 一九七七（昭和五二）年に名称を「摩耶ロープウェイ」と改称している（六甲 年譜）。
- (2) 一九七〇（昭和四五）年に改装され、「国民宿舍摩耶ロッジ」として再営業した（六甲 年譜）。
- (3) この名称は、各地で言われるようになった「百万ドルの夜景」に対抗して、「ここからの眺望は超豪華で一〇〇万ドルどころでない」という意味から千万ドルとなったという（六甲 五六）。
- (4) 例えば、一九六五年九月に台風による兵庫県南部で強風による被害があり（神戸海洋気象台）、六甲山地でも山荘の屋根が吹き飛ばされる等の被害が出ており（稲見・森 一九六八 一八〇）、マヤカンも被害が出た可能性はある。
- (5) 有名なものとして、一九八五（昭和六〇）年公開の「ユー☆ガッタ☆チャンス」（監督・大森一樹 主演・吉川晃司）、一九八九（平成元）年度下半期にフジテレビ系で放映された「過ぎし日のセレナーデ」（主演・田村正和）等がある。
- (6) 当時、大学生で年に数回を同所を利用していた筆者も、これにより営業停止になったことを友人から聞いている。
- (7) また別の説に、「グリルから出た火が元で営業停止」（田端 一九九九）という話もある。グリルとは前述したように、戦前の屋外展望台を四階として屋内化した部分で、上部五階に宴会場が増築されていた。しかし近年の写真からは、グリルを含めた増築部分は撤去されて、一部修復された痕跡も確認される。つまり、それらは何らかの理由で撤去されており、その可能性として火災が考えられるのである。ただしその時期は、既存文献の写真や国土交通省により公開されている空中写真（国土情報ウェブマップピングシステム）等から判断して、おそらくは昭和五十年代後半と推測される。このことから、仮に火災による閉鎖が事実としても、それは一時的なもので、修復作業後に営業を再開したと思われる。
- (8) 震災によるマヤカンの被害は、既存文献の写真（北陸廃物紀行）から屋上の煙突が折れて落下したというが、建物が倒壊するほどの被害はなかったようである。
- (9) ただし実際には、予算的な問題から計画止まりとなっているという。

参考文献

- 秋里雛島「摂津名所図会 卷之七」一七九六（長谷章久編『日本名所風俗図会 十卷』角川書店、一九八〇、二八一～二八三）
- 朝日新聞神戸支局「軍艦ホテル」（同編『兵庫の素顔』海文堂、一九七七、一七四～一七五）
- 稲美悦治・森 昌久「六甲山地の観光・休養地化について」（歴史地理学会編『集落の歴史地理 続（歴史地理学紀要一〇）』、

一九六八、一五九～一九〇

鶴飼正樹「現代遺跡論」(現代風俗研究会編『現代遺跡 現代風俗九一』リポート)、一九九〇、二二～三四

鶴飼正樹「現代遺跡探検隊の九年」(現代風俗研究会編『風俗研究の方法 現代風俗二〇〇〇』河出書房新社)、二〇〇〇、二〇

～二七

栗原 了「摩耶観光ホテル」(同監修『廃墟の歩き方 探索編』イースト・プレス)、二〇〇二、一九八～一九九

田端ヒロアキ「神戸 摩耶観光ホテル」(『懐古文化総合誌』「萬」臨時増刊号「愚童学舎」、一九九九、四～五・三三～三七

仲 彦三郎編『西摂大観 下巻』明輝社、一九一一

西垣堯則編『阪神電気鉄道沿線名所案内』吉原文栄堂、一九〇八

馬場竹千代「廃墟に心惹かれて 松尾鉾山に去来する時間」『別冊 東北学』八、二〇〇四、一〇八～一一八

「阪神間モダンイズム」展実行委員会編『阪神間モダンイズム 六甲山麓に花開いた文化、明治末期―昭和一五年の軌跡』淡交社、

一九九七

毎日新聞神戸支局編『六甲山系』中外書房、一九六三

松川二郎『近畿日帰りの行楽』大文館書店、一九三五

摩耶鋼索鉄道株式会社編『摩耶山案内』摩耶鋼索鉄道株式会社、一九二九

山本吉之助「明治以後の六甲の変遷」『神戸市史紀要「神戸の歴史」四、一九八一、一五～二五

湯前悟郎「摩耶観光ホテル」(同『廃墟探索 西日本篇』新風舎)、二〇〇四、七三～七九

六甲摩耶鉄道株式会社社史編集委員会編『六甲ケーブル開業五〇年史 六甲山とともに五十年』六甲摩耶鉄道株式会社、一九八

二

「KANSAI TWILIGHT ZONE 神戸・摩耶山中 幽霊ホテルの怪」『週間時事』三二四、一九九〇、六三～六四

「京阪神新建築集」『建築と社会』一四一、一九三〇

「なだ 灘神戸市編入五十周年記念誌」灘三方村神戸市編入五十周年記念行事協賛会、一九七九

「摩耶山天上寺 昭和復興の記録」株式会社 岡工務店、一九八七

「六甲山災害史」兵庫県治山林道協会、一九九八

「国土情報ウェブマップピングシステム」<http://w3land.mlit.go.jp/WebGIS/>

「神戸海洋気象台」 <http://www.kobe-jma.go.jp/>

「北陸廢物紀行」 <http://discoverjunk.cool.ne.jp/index.html>

「摩耶觀光ホテルの謎に迫る」 http://www.page.sannet.ne.jp/kmura/maya_h.htm